

水戸諸生党弔魂碑の開眼式

天狗諸生と呼び、後に正党姦物と呼ばれたる旧水戸幕末の朋党談も今は去りし昔話となつた。余（朝比奈知泉）は幼児国難に逢つて一時絶家の運命に遭い、跡を菩提寺たる常盤村の祇園寺に、寺の住僧金牛和尚の恩恵を受けた。門前の稚友とともに遊戯している時、君の翁さんは奸物で殺されたんだってネなどと友達がいうのを、当時正奸の字義すら知らぬ余は、一に朋党の区別とのみ応得て居り、ア、そなへんよなんで平氣で居たものである。

もちろんそのころ（明治一、三年）にあつては、天誅沙汰（武田金次郎一派による諸生党無差別虐殺）もなく、水戸の物情は余程穏やかになり、所謂正党全盛の時代になつて居たので、諸生の残類としては余等兄弟精々十二三才位のもの止まり、而も或いは親族（一藩中の事として婚姻の関係より天狗の姻族は余の家にも祖母の生家あり、叔母共の婚したる二家あり）に寄食し、或いは余の如く男の同胞四人迄も生存して、一人位は坊主になりて、亡き叔父従妹等の菩提を弔うも善からなんといわれ、佛寺に投ぜられたるもあつた。故吉田秀之進（野田勝一翁の親父を殺せしとて、吉野英臣が捕虜となりて水戸に刑死せし時翁は乞うて首切り約を務めたるは、今なお記憶する人もあるう）の三男に依田徳雲というものがあり、これは余と異なりて、全く得度して僧となり徳雲和尚と呼ばれるに至り、後環俗して自由党の戦士となり奔徒幾十年、帝国議会記念碑の建立を創意し、川田甕江翁の撰文を得て、巨大の石に彫刻し、其の設立の場所に窮し何處彼処と苦悶し居る内、疾を獲て倒れたるは、既に五六年前なり。今も多分其の碑石は刻成のまま、谷中の石屋に保存せらるべきことを信ず。余の投じたる祇園寺の住職は金牛和尚と呼び、余が家の宗支一門の菩提寺にてあり故もあらんか、余を遇するに一般の弟子坊主を以てせず。明治二年春より同十三年冬まで、余は和尚の鞠育を受けて、佐々木香窓（等）先生の私塾に、学制領布（明治六年）となりて、又先生に従い新装小学校（今は名は変わりたるも矢張り同じ梅小路にあると聞く）、上市小学校に転学し、当時の学制今之学制と異なりて、下等八級、上等八級に分かれ、八年の課程に分かれて、一級は半年毎に卒業するを常軌としていた。小生が下級八級に就学したるは十二才の時でした。前に佐々木先生の家塾に居り、所謂独学階級に達していた小生としては、満六歳の小児課すべき業程の容易なりしは無論の次第でありまして、殆ど一ヶ月に一級を終わり、下等即ち今之尋常小学の四年級を終わらんとした頃、佐々木先生は五軒町の上市小学校に転勤されたれば、小生も亦先生に従つて転学した。当時の学制にて上等五級（今之尋常六年程度）位までを進み、先生は既に師範学校教官に転任され、その他先生も皆師範学校の速成科出られた方々として、高等算術など教える種子が不足だなど仰せられて、上等五級位（今之尋常六年程度）までで止めさせられて、小学の卒業は出来に済み、助教ともつかず、正教員では勿論なく上市小学校の先生になりました。月給は多分二、三円戴いたと思ひます。明治十年から十一年と思ひます。茨城師範学校に始めて正課の師範生を募集し、第二期となり、同校に入りたるは十一年。十二年に卒業して母校上市小学校の筆頭教員となる。（中略）此の間は始終祇園寺に寄寓して、学校に

通い居り、金牛和尚は一句の経文も教えず、一片僧衣も纏はしめたることなく、而も余は父の如く崇め、学殖豊富な和尚とは思はざりしも、

清廉潔白、ぐんし（くさみのある食物と酒）を口にせず、唯詩と義太夫とを好み、時々絶句（漢詩の近代詩の一つ）を賦してして人に示し、又阿古屋琴責めの段（畠山重忠が平景清の情人阿古屋に琴を弾かせ、その音色で平景清の行方を知っているか知らぬかを試みる。淨瑠璃の曲）外一曲を愛し、寒夜炉頭に坐し人に聴かしむも楽しみとしたり。去れば十三の冬に至りて和尚遷化せらるるや、余は茫然為す所を知らず。當時和尚の弟子四散して在らざりしかば、専同じく笠間玄勝院、又同じ禅宗なるも臨済宗の下市常照寺の住僧しきりに余に勧めて、和尚の後繼たらしめとしたるも、余は僧たる教育なき故を以て固辞し、先輩佐々木先生並びに福田晋、国分行道等諸氏の後援を仰ぎ、後に世の養母になりたる伯母の弟青山勇が内閣小使として東京に務め居たるを頼り、先年没したる小林元茂（当時は先々代元茂翁在世中にて金之助と呼びたり）及び福田氏の嗣子重と三人袂をつらね水戸を発したるは明る年十四年の春なり。爾来或いは大学に入りて半途退学し、在学中東京新報を創刊し、二十五年之を廃刊して東京日日新聞を発刊し、三十八年の春筆硯と縁を絶つに至れり。一身の小歴史此の如きも、幼にして党禍に逢い殊に同郷の老先輩多く、甲子、戊辰の二変に仆れたるを以て、倚るべき郷人少なきは身に感じながら、党禍の慘を眼前に見たるをば、余の宗家たる尚（今年七十才）にも、余の兄熊蔵（今年死す、尚と同年）にも遙かにに及ばず、従つて格別の感想とてなく、諸生党弔魂の為には、先年脱走帰りの老先輩発起して、一碑を上市神應寺の北域に建て、会津出身の南摩羽峰先生に嘱して選文せしめたる由なるも、余の暢氣なる末だ一回も其の碑を見たることあらざりしに、昨年の秋ゆくりなくも、実兄及弟と共に千葉県八日市場付近松山台なる大木佐助翁を訪い、翁の先代が水藩士の遺骸（勿論首なし、水戸の墓地に葬りたるは首のみ）を改め、一小碑を建てて之を表し置たるに、何處にもある迷信の徒ありて団子を奉納して願掛けすれば効験ありとて、兎に香花は常に絶えず、翁は其の時一碑を立て水藩士戦没の跡を表したければとて、余に文を嘱したれば、余も帰り、数月を経て翁の催促に遭い、拙筆を阿して之を草し、贈り遣はしたるに、碑石出来して、今年（大正十五年）十一月十日（旧暦十月六日）は戊辰戦役五十九年目に当り、同日午後より開眼除幕式を行う旨案内來りたれば、余は宗家尚、尚の再従兄佐藤雄三（佐藤図書の息にて、佐藤主税の弟今年七十三才）及び寛助太夫の一族多記等共に参会すること約したり。水戸にも若し左記碑文に揚ぐる戦死諸人の遺族で現存する人もあるべけば、茲に丈翁（飯村丈太郎、いはらき新聞社長）に請うて「いはらき」版の一端を借り、此の事を告ぐととはなしむ。余の書き与へたる碑文は左の如し。

水戸藩土弔魂碑（原文漢文）

松山 中台両村 徳川氏の時幕府直轄に属す。旗下の士中根定之助を宰す。明治維新 府藩県制を設け、幕領に府県を置く。両村合わせて宮谷県と為る。柴山文平県令に任せられ、里正の称は、名主を組長に改む。大木三右衛門中台組長に任じ、下山九兵衛松山組長に任せられる。佐助翁は、即ち三右衛門の嗣子なり。是の時奥羽まだ平定せず。水戸藩党争餘焰なお熾なり。朝比奈泰尚、その子泰彙 簪政布 その子政常 及び市川弘美諸生党を率い、明治元年三月 水戸を発し、佐幕諸藩とともに越後、会津を転戦、九月水戸に帰り、貞芳大夫人に頼み、情を訴えんと欲するも果さず、城門外弘道館により、健闘乱撃遂に敗退す。時に十月一日なり、泰尚残卒を率い、銃子より八日市場へ出、六日朝中台に向う。天狗党多古街道を進み、松山台に至る。両軍接戦 互いに砲火を交え、巳（九つ時、正午）に至る。一は衆を恃み、専ら火器に頼る。一は死を決し、須ろう且つ憚竭 大呼短兵を求めてするも応せず。飛丸雨の如く諸生党軍遂に全滅す。遺屍二十五、其の一首無し。戦熓んで後、柴山県令両使民に命じ、用水渠を傾涸し遍く搜索するも、遂に獲ることを得ず。大木、下山両組長及び中台村長山崎八郎兵衛 中台仁右衛門 松山村長小関佐兵衛 関中兵衛等相い謀り、戦後二十五年遺骸を改め、之を葬り、碑を建てて祀る。歳時香火絶えず、以後今日に至る。大正十四年四月 予 家兄及び弟金三郎と、始めて戦蹟に至る。大木佐助翁 予等兄弟を導き、邸園を指點し、詳らかに当年の状況を説く、其の戦袍に由つて宗家父子の為を知る。其の首級無き者は蓋し簪政布 以つて其の死分明なるも、其の首級戸に到るを伝えず。傾者（このごろ）両村有志相い謀り弔碑を建てんとし、予に之を記するを求む。予不敏にして何を以て之に當る、顧みるに予また朝氏の一塊肉なり。生父、伯叔父と従兄皆国難に斃る。今翁頼りて一門奮闘宗家陣没の跡を審らかにしたり。翁古稀を跋ゆるも 豊饒強記いづくんぞよく此れに至る。予不安を以てあえて辞するを得ざるなり。戦没者二十五人氏名を左に録す。

朝比奈弥太郎泰尚 同鞠負泰彙 簪助太夫政布 佐藤主税 佐藤貞之助 富田理介
生井松次郎 橋本小三郎 丹下斎蔵 大久保貞蔵 大高孫兵衛 山田惣次郎 友部徳之助
錦引隆三郎 春山崇七 鈴木欽一郎 佐藤留男 大嶺総七郎 河合子之吉 上彦四郎
小山金平

（外従者四人）

大正十五年四月

「朝比奈知泉文集」（大十五、十一、九 いはらき）